

2016年第10回中国応用地質学会議(工程地質大会)への参加報告

顧問 千木良雅弘

2016年10月13日～21日に中国の成都において標記の大会が開催された。本年3月のIAEGニューズレターによると、中国による大会の概要は以下のように記載されている。

大会の参加者は約1,500人で、1,000人を超える参加者は今回が初めてであった。六つの発表会場において、それぞれ特別講演と優れた若手発表が準備された。トピックスは、新規開発における運送、エネルギー、海洋、都市などに関する主な応用地質的問題、応用地質に関する新理論や技術、応用地質学の教育や発展に関するものであった。21の招待講演、58の主題発表、220の一般発表、そして19の若手の発表があった(表-1と多少数が異なっている)。国内外の専門家が広く深く関係できるように準備委員会が設置された。

この大会は、中国における応用地質の基礎研究が十分に達成していること、応用地質的な技術の革新と実用を示し、困難かつ重要な地点に対する国の戦略や精神に貢献する工学であるということに焦点を当てている。中国の応用地質学はすばらしく進歩しており、国際的にも多大な影響を及ぼしている。なお、本大会の前の10月10日～13日には同じく成都において第14回自然災害防災に関する国際シンポジウムが開催されている。

以下は第10回工程地質大会に参加した千木良の感想である。

実際の会議は10月15日～18日に行われた。主催は中国地質学会で参加費は約3万円(会議と食事のみ、学生は半額)であった。

発表数の内訳は表-1に示す通りで、発表の多くは大学の研究者のものであった。今回、初めて参加したが、その活気には圧倒された。開会式は、伍法権主任委員(Prof. Faquan

Wu ; IAEG 事務局長)の司会で進められ、その中で黄潤秋(国家環境保全部副部長)から本大会の変遷が紹介された。それによれば、今回は第10回だが、毎回年を追うごとに人数が倍増してきたように思われた。これは、たぶん中国が鉄道や道路をもつすごい勢いで建設し発展していることを反映しているようである。外国からの参加は、現IAEG会長のアメリカのScott Barns氏と千木良のみであった。

本大会の開催準備に当たった工程地質委員会は地質学会の傘下にある。また、科学研究費補助金の説明があり、これは日本の科研費とよく似た仕組みのようであった。科研費の中では工程地質への補助金も大きな割合を占めていた。

表-1 発表数の内訳

キーノート講演(30分)			21
分科会	主題発表 (25分)	一般発表 (15分)	計
地質災害・防災	12	50	62
交通・ライフライン	6	23	29
資源	6	21	27
海洋・近海	3	14	17
汚染・環境	9	37	46
都市	3	14	17
地震	6	22	28
自然・文化遺産	3	14	17
新理論・技術	6	22	28
合計	54	217	292

キーノート講演は、大ホールで全員が聴講できるかたちで1日半行われ、その後2日半は分科会の発表であった。私が聞いたのはキーノートと地質災害の主題発表だけであった。内容的には、具

体的なデータが何で、引用がどうなっていて、といった形の不十分さはあったが、いずれもしっかりした発表だと感じた。発表の中で詳しい地図や断面図が不在というのは、やはり中国の事情のように思われた。

あと 10 年もたてば中国国内における仕事の需要が減ってきて、かなりの研究者と技術者が世界に打って出るようになると思える。

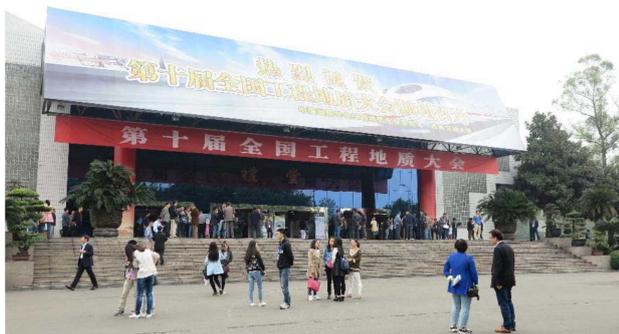


写真-1 メイン大ホール入口



写真-2 キーノート講演を聞く聴衆の様子
2階席まである。

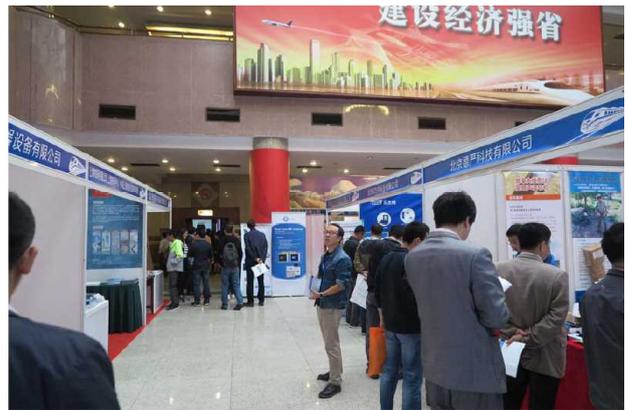


写真-3 企業の展示ブース，全部で 20 程度か。



写真-4 司会をする伍法権氏(Prof. Faquan Wu) 中国科学院を定年退職し、現在は紹興文理学院教授